2018年3月18日　中原キリスト教会・日曜礼拝

**「エズラの祈り」**

**聖書箇所:エズラ記9:5-9**

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　本日は、エズラ記からです。サムエル記、列王記、歴代誌に続く歴史書です。列王記、

歴代誌はユダ王国がバビロニア王ネブカドネザルに滅ぼされ、ユダヤの上層階級の人々が

バビロニアに連れて行かれたところで終わっています。バビロン捕囚と言います。しか

し、そのバビロニアは東で勢力を得て強大になったペルシャに滅ぼされます。ペルシャは

宗教的・文化的にはそれぞれの民族の独自性を尊重する方針を採用します。その結果、バ

ビロニアを征服した直後にクロス王はバビロニアに居たユダヤ人がカナンの地に帰郷する

ことを許可します。エズラ記1:1では「ペルシヤの王クロスの第一年に、エレミヤにより告げられた主のことばを実現するために、主はペルシヤの王クロスの霊を奮い立たせたので、王は王国中におふれを出し、文書にして言った」と記されています。そしてエルサレムに神殿を再建するように言います。バビロン捕囚から約70年後です。

　このことによって、クロス王は異邦人でありながら聖書の中では非常に高く評価される

人物となりました。おふれの一番最初は「天の神、主は、地のすべての王国を私に賜った」

という言葉です。ここでの「神、主」は「イェーワー・エロヒー」でありイスラエルの「主

なる神」です。即ち、クロスを主なる神の僕として扱っているのです。実は、異邦人の王、時にはイスラエルに残虐なことをしたバビロニアのネブカドネザルをさえ、主なる神の僕と言っています。この点は、他宗教に比し、イスラエル信仰の大きな特徴です。通常、宗教は自らの信仰する神を守護神とし、敵を倒してくれるもの、として扱います。従って、民族の敗戦はその神の無力さを意味し、その信仰は捨てられます。しかし、イスラエルの主なる神は世界の創造者ですから、敵の行動も神の計画の一部になります。従って、イスラエルの敗北は何らかの神の意志から出ているのだ、と理解することになります。後にユダヤ教と称せられることとなるイスラエルの正統的神学は、それは「イスラエルの罪に対する主なる神の罰または試みである」と理解します。ユダヤ人の歴史は即ち迫害の歴史と言っても良いのですが、この苦難の中を生き抜いてきた信仰は、イスラエルはその罪の結果、主なる神はイスラエルに苦難を与え、その忍耐を試しているのだ、と解釈する、ところにあります。そしてその苦難の民に主なる神は救いの希望を与えている、というのです。この信仰がユダヤ人をここまで生きながらえさせてきた原動力です。その一側面が異邦人の王をも手足として使う、主なる神への信仰ということです。

　この捕囚はイスラエルの信仰形成において重大な影響を与えます。また離散の民として

のユダヤ人の歴史はこれにより始まるのです。捕囚に関し、いくつかの点を承知しておく

必要があります。まず、①ユダ王国の滅亡によるバビロン捕囚以前にも捕囚はあった、と

言う点です。ユダ王国の滅亡の前に、北王国イスラエルがアッシリヤにより滅ぼされてい

ます。その時も上層階級の人々は追放ないし捕囚の運命にあっています。彼等は、当時の

アッシリア支配下のバビロニア・ニネヴェのみならず、今のイランであるメディア地方、

エジプトのアレキサンドリア等に移住しています。ユダ王国の滅亡の時はかなり大規模な捕囚であったと想像されます。捕囚と言うと囚人として牢屋に入れられていたと思うかもしれませんがそうではありません。基本的には土地の有力者の奴隷となったのです。奴隷と言ってもエジプトのピラミッドを作った奴隷労働とは違い、基本的には農業労働者ですが中には知的労働に従事したり、役人として上層階級の一部に入って行った者もいます。ダニエル書ではバビロニアで王の側近となったユダヤ人のことが記述されています。従って、エルサレムに帰還した人間たちもバビロニアでそれなりの扱いをされていた人々です。帰還の民はエズラ記2:64では42,360名とされています。これ以外に奴隷が7,337名となっています。実際はもっと少数でしょう。

次に申し上げておくべき点は、②捕囚と言っても住民全員が連れて行かれたのではあり

ません。イスラエル社会の上層部の人間だけです。カナンの地で農業や小規模牧畜に従事

していたような、言わば一般庶民はその地にとどまりました。この民のことを「残された者」といいます。しかし、指導者層を失っていますのでその信仰もイスラエルの伝統的な「主なる神」への信仰から、従来から存在した地場信仰との混清が発生したと考えられます。また指導者層を失ったカナンの地は他民族からの侵略を受け、彼らの信仰との混清も発生したと考えられます。アッシリアは追放・捕囚ののち、その地への植民を政策的に実行したようですので、文化的・宗教的に混清が発生することは必然でした。ユダ王国の北のサマリヤの地では「主なる神」への信仰は残っているものの、地場信仰に伴う、各種祭儀は並列的に存在しました。バビロンの捕囚されていった人々はかつてのイスラエル信仰を墨守し更に純化させていった、と考えられます。主なる神の命令に従わなかったため、神の罰として捕囚が起きたのだから、神の命令である律法を守ることにより、神の祝福が回復される、という信仰です。そのような堅い信仰をもった人々が、地場信仰の影響を強く受けているカナンの地に戻ってきた訳です。

　エズラ記という名前の文書はこの正典「エズラ記」以外にもいくつかあります。日本基督教団の教会とカソリック教会で使用している新共同訳という日本語訳がありますが、その続編に「エズラ記（ギリシャ語）」という文書と「エズラ記（ラテン語）」という文書が収められています。これはローマ・カソリックのラテン語聖書に入れられていた文書を「続編」ということで入れたものです。「エズラ記（ギリシャ語）」の方は、歴代誌とエズラ記の全体を要約したようなものですが、「エズラ記（ラテン語）」の方は、エズラに臨んだ「主の言葉」やエズラが見た七つの幻の記述がその内容です。「主の言葉」は明らかにモーセに臨んだ「主の言葉」即ち律法を意識したものです。幻の部分は「ダニエル書」などに見られる「黙示」即ち終末思想を表現したものです。従って、時代はだいぶ、下ってからのものと考えられます。新約聖書「黙示録」に繋がって行くものです。これはこれとして興味深い文書ではありますが、本日のエズラ記は正典エズラ記のみに依拠してお話したいと思います。

　エズラ記によれば、最初の帰還の人々のリーダーはシェシュバツァルです。この人物は

ユダ王国での最後から二番目の王エホヤキン(ヨアキン)の四男です。その一行の中には、

ヨアキン王の長男シュアルティエルの子ゼルバベルとエホツァダクの子の祭司ヨシュアが

いました。ゼルバベルはシェシュバツァルの甥ということになりますが、実は同一人物で

ある、という説もあります。このゼルバベルと祭司ヨシュアは祭壇を築き、全焼の生賛を

奉げました。そして翌年、神殿再建の工事を始めた、とあります。その神殿の礎を築いた

時、皆で神を賛美しました。3:11には「そして、彼らは主を賛美し、感謝しながら、互い

に、「主はいつくしみ深い。その恵みはとこしえまでもイスラエルに」と歌い合った。

こうして、主の宮の礎が据えられたので、民はみな、主を賛美して大声で喜び叫んだ」と

あります。「その恵みはとこしえまでも」は神賛美の定型句です。詩篇に多数出てまいります。そして12節では「しかし、祭司、レビ人、一族のかしらたちのうち、最初の宮を見

たことのある多くの老人たちは、彼らの目の前でこの宮の基が据えられたとき、大声をあ

げて泣いた。一方、ほかの多くの人々は喜びにあふれて声を張り上げた」とあります。「最

初の宮をみたことのある老人」というのはユダ王国が滅びる時のエルサレム神殿破壊前の

神殿のことでしょうから、50年以上前のことになります。おそらく言い伝えでその華麗さ

を聞いていたのだろうと思われます。ローマ帝政下での古代歴史家ヨセフスによれば、再

建しようとした神殿は、過去のソロモンがたてた神殿に比してみすぼらしすぎて泣いた、

と皮肉っぽいことを言っています。比較にならない程小規模であったろうとは思われます

が、なんといっても再建がスタートしたのですから他の人と同様、感激で泣いた、と考え

てもよさそうです。この神殿は第二神殿と言われ、イエス様お誕生の少々前にヘロデ大王

により拡張・完成された神殿です。これがAD70年にユダヤ人の反ローマの内乱の鎮圧時に

徹底破壊された神殿です。今、「嘆きの壁」として少し残っています。

　この神殿再建のリーダーはゼルバベルでした。「バビロンの種」という意味です。問題

は従来からその地にすみついていた人々です。エズラ記では「ユダとベニヤミンの敵たち」

と言われています。具体的には後にサマリア人と呼ばれユダヤ人の軽蔑の対象となった

人々です。同じ神を信仰している、として神殿再建の協力を申し出ましたがバビロンから

帰還したゼルバベルとヨシュアはこれを断ります。その後、その地の民は妨害をします。

そしてペルシャの王アルタシャスタ、正式名はアルタクセルクセスI世に手紙を送ります。

内容は"帰還のユダヤ人はこの神殿が完成したらペルシャから独立し、税金を納めるのを

止めようとしている。エルサレムの町は昔から反抗的な町なのです“と告げ口します。王

は根拠のあることだと判断し、再建工事を中止させます。そして使いが送られ、「武力を

もって彼らの働きをやめさせた」とあります。ちょっと余談をもうしあげます。この告訴

状はアラム語で書かれていた、と記されています。4:8から6:18まではアラム語で書かれています。アラム語はヘブル語と兄弟の言葉ですが、メソポタミア、シリアで使われた言葉です。バビロン捕囚の人々もアラム語を使っていた、と思われます。ダニエル書も半分くらいがアラム語です。新約聖書にもパラパラと出てきます。ではイエス様の時代にはユダヤ人は日常的には何語を使っていたのか、という問いがあり、いまだ決着はついていません。日常用語としてはアラム語を使い、聖書や宗教に関する話にはヘブル語を使ったのではないか、というのが有力説です。文法的には大変似ていますし、共通の言葉も多数あります。とにかく、アルタシャスタのアラム語命令書によって神殿再建は中止されました。そもそも、地場の人々の反対のなかで大規模工事をやるためにはよほどの指導力がなければできない相談です。

　ここで預言者ハガイとゼカリヤが登場します。聖書にもハガイ書、ゼカリヤ書という文

書があります。預言者に激励され、ゼルバベルとヨシュアは立ち上がり神殿再建を再び始めます。その地の総督に任命されていたタテナイ達は再建に携わっている人々が王の指図という根拠を持ってやっているのかどうか、という照会状をペルシャ王に出します。王はダリヨスI世です。王はバビロンの文書保管所を調べさせ一つの巻物を発見します。それは、クロス王が神殿再建の命を下したものです。エズラ記の最初に述べたクロス王の命令書の内容とは異なります。こちらは具体的に神殿の大きさなどにっいて指示しています。そして、神殿再建をやらせておけ、と指示します。更に資材調達など支援するように言います。総督タテナイ達は忠実に王の命令を守りました。そして6:14で「彼らはイスラエルの神の命令により、また、クロスと、ダリヨスと、ペルシヤの王アルタシャスタの命令によって、これを建て終えた」と言われています。アルタシャスタは神殿完成後の王ですが、神殿完成後城壁工事がなされその完成がアルタシャスタの時であったので、このような言い方がされたのではないか、と推察されています。神殿完成後、いけにえをささげユダヤ暦正月十四日には過越しの祭りを行いました。今でも過越し祭は同じ日です。過越しの祭りは種入れぬパンの祭りでもあります。1週間、酵母を入れないパンを食べるということです。出エジプトの記念の祭儀です。イエス様の最後の晩餐の日です。聖餐式の形で今の我々にもつながっています。

　これで神殿再建のお話は一応完結ですが、そもそもペルシャはなぜ、宗教的にこのよう

な寛容な政策をとったのでしょう。当時のペルシャの国教はゾロアスター教でした。国と

国の争いは神々の争いとみなされ戦いに勝利すると、自分たちの神を敗戦国に強要する、

ということがあってもおかしくはないのですが、聖書で見る限り、ペルシャはそのような

態度は採らず、各民族の宗教を認め、宗教の強要は避けていたようです。むしろ、ユダヤ

人については自らの宗教を守るよう勧めており、祭儀の支援さえしていたようです。当時の世界政治の状況は、ペルシャとギリシャの対立に特徴づけられます。ペルシャはギリシャとの戦争でいつもかなりいいところまで行くのですが最後のところで敗退する、というのを繰り返します。最後はペルシャはエーゲ世界を放棄します。また南の大国エジプトは、早い時期にペルシャの支配下にはいるのですが、いつも反乱の気配有り、ペルシャはいつも気にしていなければなりませんでした。BC5c終わりにはエジプトの大反乱もありました。制圧に苦労します。このような政治情勢の下で、カナン地方は軍事的に重要な地域でした。ギリシャへの通過地域であり、エジプトへは必ず通る地域です。ペルシャはイスラエルが自分たちの属国でありつつも、いざと言う時にはギリシャ、エジプトとの戦争の後方支援を期待していたのです。そうなってもらうには、いつ反抗してくるか心配という事では困ります。イスラエルの自主的成長を促しながら、属国としての地位は変わらないという国力のそれなりにある国になってもらう必要があります。そのためペルシャが任命した総督は派遣するにしても、彼らの宗教・文化は尊重する態度を示したのです。ペルシャはこの政策をイスラエルに対してだけではなく、一般的に採用していました。本当に独立してしまっては困りますから、自立的とはいっても限度があるのは当然です。世界的な帝国になった国の拡大期においてはそのような寛容政策が採用されています。ローマ帝政の1cの拡大期には比較的寛容な宗教政策が採られていました。ムハンマッドの後しばらくしてのサラセン帝国もそうです。のちの元帝国もそうでした。イギリスも宗教的には寛容政策であったと言えるでしょう。

　エズラ記に戻ります。神殿はまがりなりにも完成しました。その後、エズラが登場しま

す。エズラは祭司アロンの血を引く者でモーセの律法に通じている者であった、と言い

ます。律法の学者です。日本流では学問の神様、菅原道真と言って良いかもしれません。

ユダヤ人の伝承では「第二のモーセ」と言われるようになりました。律法を齎し宗教改革

のリーダーとなった人物だからです。学者エズラはペルシャの王アルタシャスタの時、バ

ビロンからエルサレムに来ました。エズラの帰郷の年については三説ありますがここでは

最も早い説を仮定します。アルタシャスタ王のエズラにあてた手紙には各種のお土産を持

ってエルサレムに行き神の前に備えることを要求している。7:21ではアルタシャスタ王は

「天の神の律法の学者である祭司エズラが、あなたがたに求めることは何でも、心してそ

れを行え」とまで言っています。また裁判官を任命し律法をその地に行われるようにしろ、

との命を受けます。7:26では「あなたの神の律法と、王の律法を守らない者には、だれに

でも、死刑でも、追放でも、財産の没収でも、または投獄でも、その判決を厳格に執行せ

よ」と言われています。要するに律法遵守です。8章ではエズラの一人称の記述となり、一緒にバビロンから来た人々の家系と人数が挙げられます。そしてエルサレムに着き、その地の太守たちと総督たちに王の命令書を渡しました。彼等はエズラ達や神殿のために援助をしました。この辺はダリウス王の命令書に従い、ゼルバベルやヨシュアを援助した、総督タテナイと似たような表現がされています。

　そして9章に入ります。その地の司たちが、エズラに、当地のイスラエルの民や祭司について、近隣の民族と縁を結び、これらの異邦の入々とまじりあってしまっている、という実情を伝えます。ここには捕囚の時に残された人々のことも意味していたかもしれませんが、エズラ以前にバビロンから帰還したユダヤ人の民と祭司たちのことについてでした。

神殿再建は曲がりなりにもなんとかやったのですが、その信仰的基礎はなっていなかった、

と言う訳です。9:3ではエズラは「このことを聞いて、着物と上着を裂き、髪の毛とひげを引き抜き、色を失ってすわってしまった」と言っています。そして5節から9章の最後までがエズラの祈りです。最初の言葉は「私の神よ。私は恥を受け、私の神であるあなたに向かって顔を上げるのも恥ずかしく思います。私たちの咎は私たちの頭より高く増し加わり、私たちの罪過は大きく天にまで達したからです」という、咎は高く増し加わり、罪過は大きく天に達する、と言います。自分を含むイスラエルの罪の大きい事を認め神に顔を上げるのも恥ずかしい、というのです。この「恥ずかしい」という言葉はヘブル語で「bo:sh」、その名詞形「恥」は「bu:sha:」と言い旧約聖書でも重要な単語です。日本人の恥は回りの人に顔向けできない、という意味での恥ですが、イスラエルの恥は第一次的には主なる神に申し開きができない、という事です。神の選びに不相応である、ということです。そして7節で「私たちの先祖の時代から今日まで、私たちは大きな罪過の中にありました」と認めます。

　人間はアダムとエバの時代に原罪を負い、それが新約の時代にまで続いているのだと考

えがちですが旧約における罪の扱いはそう単純ではありません。創世記では「原罪」とい

えるような表現はありません。むしろ、イスラエルの歴史の中で、イスラエルの罪の現実

が繰り返され、イスラエルにも罪認識の深みが培われ、イスラエル王国の滅亡、捕囚・離

散の民の経験を通して、罪は「原罪」と言われるところまで深められた、という事ができ

るでしょう。罪の萌芽はアダムとエバにありますが「原罪」というすべての人に決定的に

運命づけられた罪というところに到るのはイスラエルの歴史を通してです。のちに、パウ

ロは“すべての人は罪人であり、自らの力では罪の身から脱することはできない"という

徹底した罪人認容を言いますが、そのような認識はイスラエルの歴史のなかで、明らかに

されていったものです。エズラのここにおける罪の告白は徹底しておりパウロの罪意識に

通じます。

　この罪即ち主なる神への不従順のためイスラエルは苦難の歴史を経験することになった、

とエズラは言います。しかし彼は希望を見出します。8節に言います。「しかし、今、しば

らくの間、私たちの神、主のあわれみによって、私たちに、のがれた者を残しておき、私

たちのためにご自分の聖なる所の中に一つの釘を与えてくださいました。これは、私たち

の神が私たちの目を明るくし、奴隷の身の私たちをしばらく生き返らせてくださるためで

した」とあります。「のがれた者」とは滅亡から逃れた者のことであり、バビロンの捕囚

の地に在っても滅亡せず「主なる神」への信仰を守った人々のことをさしています。もしかしたら、捕囚されず、イスラエルの地に残った者の中にも主なる神への信仰を守った「の

がれた者」も居たかもしれません。エズラはそのような人々に希望をつなぐことができる

と言っています。そして9節では「ペルシヤの王たちによって、私たちに恵みを施し、私たちを生かして、私たちの神の宮を再建させ、その廃嘘を建て直させ、ユダとエルサレムに石垣を下さいました」と感謝の祈りをささげています。ここまでではキリスト者の信仰と全く同じ、祈りの態度です。罪の告白と悔い改め、そして主の憐みによる希望を与えられ感謝の祈りをささげる、というものです。

次に11節から当時のイスラヱルの人々の婚姻について激しい批判を展開します。即ち、"預言者たちによって「あなたがたの娘を彼らの息子に嫁がせてはならない。また、彼らの娘をあなたがたの息子にめとってはならない。永久に彼らの平安も、しあわせも求めてはならない」と言われているのに“この乱れた状態は何たることだ”というのです。そして主なる神は少数の「のがれた者」についてさえ「あなたは私たちを怒り、ついには私たちを絶ち滅ぼし、生き残った者も、のがれた者もいないようにされるのではないでしょうか」と叫びます。しかし、9章の最後で「イスラエルの神、主。あなたは正しい方です。まことに、今日あるように、私たちは、のがれた者として残されています。ご覧ください。私たちは罪過の中であなたの御前におります。このような状態で、だれもあなたの御前に立つことはできないのに」と言い、やはり主なる神は「のがれた者」に希望をつなぐことを赦されている、と結びます。

10章に入るとこのテーマが更に続きます。一人の人がエズラに提案をします。10:3です。「今、私たちは、私たちの神に契約を結び、主の勧告と、私たちの神の命令を恐れる人々の勧告に従って、これらの妻たちと、その子どもたちをみな、追い出しましょう。律法に従ってこれを行いましょう」と言うのです。異邦人の妻を離縁し子供もみな追い出しましょう、というのです。そしてエズラはイスラエルの人々にこれの実行を約束させます。そして10-11節では「祭司エズラは立ち上がって、彼らに言った。「あなたがたは、不信の罪を犯した。外国の女をめとって、イスラエルの罪過を増し加えた。/だから今、あなたがたの父祖の神、主に告白して、その御旨にかなったことをしなさい。この地の民と、外国の女から離れなさい。」と言います。そして会衆は約束します。既に実に沢山のイスラエル人がこのような状態にあったようです。名前がずっと列挙されエズラ記の最後は「これらの者はみな、外国の女をめとった者である。彼らの妻たちのうちには、すでに子どもを産んだ者もいた」という言葉で閉じられます。これがエズラの指導による宗教改革の先駆けでした。その後、神殿での祭儀のやりかた等において正しいやり方を確立していきます。このエズラの宗教改革の内容はエズラ書の次のネヘミヤ書の8母章に記述されています。

　この箇所をみると我々は、"離縁された妻や追い出された子供はどうなっちゃうのだ。

そんな身勝手なことは許されるはずはない"と言いたくなります。旧約聖書においてもそ

んな簡単に離婚が許される訳ではありません。マラキ書2:16では「わたしは、離婚を憎む」

とイスラエルの神、主は仰せられる。「わたしは、暴力でその着物をおおう」と万軍の主

は仰せられる。あなたがたは、あなたがたの霊に注意せよ。裏切ってはならない」と言わ

れています。旧約に於いても結婚は神の前での契約ですから、原則、解消は赦されません。

また外国人については寄留の民に対し憐みをもって接しなければならないことが言われて

おり、またルツ記のようなユダヤ人の義母に忠実な女性を讃える文書もあります。このエ

ズラの行動をこれらの事柄を考慮して、もっとソフトな形で解釈する余地はあるかもしれ

ません。しかし、「主なる神」への信仰を回復するために、人聞の目から見ると残酷、と

思われるようなことも旧約の時代には起こっているのだ、という事実は認めざるを得ませ

ん。それは旧約に流れるイスラエルを通しての被造物救済の摂理と関連しているのだと思

われます。イスラエルに純粋な「主なる神」への信仰を確立し、世界がそれを見ることに

より救いの道が示される、という考え方です。そのため、イスラエルにおける純粋な信仰

の確保が決定的に重大な事柄になるのです。しかし、この計画は成就しません。イスラ

エルの罪はそのような純なる民の形成には至らせなかったのです。結局、神は新しい約束、

即ち一方的な神による罪の贖いという解答に行かなければならなかったのです。変な言い

方かもしれませんが、イスラエルを、「主たる神」を信仰する選ばれた民とするための神の

忍耐は驚くばかりです。

　エズラはユダヤ教の基礎を作った人としてユダヤ人の絶大な信頼と尊敬を得ています。

しかし、このエズラの宗教改革には外国人排斥という民族主義的側面があり、それはユダ

ヤ教自身にも影を落としていきます。そもそも旧約には他民族に対し開放的な流れと、排

斥的流れの両方が見られます。このエズラの婚姻問題のところには排斥的要素が大変強く

出ています。ここまで思い切ったことをやらざるを得ない程、カナンの地における「主な

る神」への信仰は地に落ちた状態だったのだとは思います。エズラも悩みつつ決断してい

る様子が聖書からもうかがえます。逆に、このような排他的な要素が強くあったから、ユ

ダヤ教が成立しえたのだ、とも言えます。普通あれたけ迫害され、離散の民とされれば民

族は死滅するのが普通でしょう。しかも人種的には純潔の民でも何でもありません。民族

混血の代表のような民族です。唯一民族を民族たらしめているのはあの信仰・宗教です。

世界で他にない、宗教共同体としての民族を形成していったのです。私たちの主イエス・

キリストはこれに対し明確に答えを示しておられます。旧約における他民族に対する開

放的流れを徹底させています。エズラ宗教改革はエズラの祈りの最初の部分のように、

主なる神への信仰という我々の信仰と直接つながっている部分と、イエス様によって否定されたユダヤ人の排他性という部分がある、ということです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、本日はエズラ記より学びました。エズラは、イスラエルの宗教的堕落の様を見て、信仰の原点に帰ることの重要さを示しています。私たちにとっては信仰の原点は聖書に他ならないこと、を思い起こされてくれています。エズラの願いは、ユダヤ人の排他性、独善性という側面を齎したことを否定できません。私たちは、旧約の流れの中で、恩寵としての愛の律法を示されたイエス・キリストを主と仰ぐものです。福音の証人としての私たちに、知恵と力と、そして勇気をお与えください。主のみ名により祈ります。アーメン）